マゾメスお兄さんは
褐色男の娘ダンサーに
勝てない
R18
成人向け

マゾメスお兄さんは

褐色男の娘ダンサーに勝てない

【登場人物紹介】

〇ルチル

　行く先々で人々からの依頼をこなして路銀を稼ぎながら旅を続ける根無し草の青年。物静かでクールな性格をしているが、本人曰く「人見知りなのと喋るのが面倒くさいだけ」とのこと。

　そのズボラな性格から長らく髪を切っておらず、肩まで伸びた髪をおさげにくくっていて、さらには邪魔な前髪をヘアピンでまとめている。それに加えて中性的な顔立ちと細身でしなやかな肢体を持ち合わせているため、女性と間違えられてしまうこともしばしば。しかし、そのことについて本人は特に気にしておらず、彼を知る者からは「相手を油断させるためにわざと女性に寄せているのでは？」「実は女の子になりたい願望があるのかもしれない」等さまざまな声があがっている。

　華奢に見える体躯に反して体術の腕前はなかなかのもので、魔物の討伐や悪党の成敗等の依頼が得意。あまり治安のよくない国では彼の性別を見誤った男にしつこくナンパされたり力づくで襲われそうになるなどの出来事が茶飯事だが、ことごとく返り討ちにしている。

　放浪生活が長く異性と接する機会に恵まれなかったこともあり、エロ耐性はかなり低い。それでも年頃の男である以上性欲には逆らえず、旅先で風俗店を見かける度に入店しようと試みるが、いつも直前で怖気づいてしまうため未だに童貞。

　むっつりスケベで隠れマゾ気質。

○アヤナ

とある国のパブで働く踊り子。褐色肌によく映えるアッシュブロンドのボブとくりくりとした碧眼、そして小柄な体格に女性ものの服を好んで着用しているため誰でも最初は女の子だと思うが、れっきとした男の子であり、ちゃんと男性器もついている。なぜ女装をしているのかというと、「自分に一番似合うと思う服を着てるだけ」らしい。

踊り子としては「この国唯一の男の娘ダンサー」を自称しており、一部の層からカルト的人気を博している。彼のダンスは可憐ながらもどこか妖艶で、とりわけ身体の柔らかさを活かしたなめらかな腰使いに定評があり、終演後には前屈みになりながら席を立つ男性客も多いのだとか。

実は彼のステージには一部のＶＩＰにしか知られていない「裏オプション」が存在し、高額な追加料金を払うことによって過激な衣装を身にまとったアヤナのストリップショーを楽しむことができる（ただしお触りは厳禁）。彼自身、性欲が強くてアブノーマルなプレイが好みなのでそういったことに抵抗はないものの、最近は脂ぎった貴族のオジサンに愛人関係を持ちかけられることが多くて辟易しているらしく、そんな日常を変えてくれる運命的な出会いを夢見ている。

乳首やアナルはセルフ開発済みで、普通のオナニーよりもそれらを用いる方が好み。アナルは処女（オモチャ経験はアリ）だが、過去に酔っぱらった踊り子仲間の女性に襲われたことがあり、童貞ではない。その経験から異性が少し苦手な反面、同性を恋愛対象として見ている。

ランタンの灯りが煌々と照らす宿の一室で、ルチルはベッドに身を預けながらひとり快楽にふけっていた。
「はぁ……っ❤」
天井に向かってそそり立つペニスは既に先走りに塗れており、それを潤滑油代わりに左手が上下に動いて快感を送り込む。もう一方の手は、薄手の肌着の上からあまり肉のついていない胸板をまさぐり、硬く膨らんだ突起を指先で転がしている。
「んっ、ちくび気持ちいい……❤」
にちにちという水音に、ハスキーなよがり声が混じる。そうやって声を出すとなおのこと気持ちよくなるのは、彼のマゾヒスティックな性質に依るものかもしれない。
「イく……イきそう……❤」
他人にはとうてい聞かせられないような甘い鳴き声を発するルチル。そんな彼のオナニーのオカズは本や絵などではなく、専ら彼の脳内に保存されている記憶である。童貞で女性慣れしていない彼にとっては、たとえ些細なエロティシズムであっても夜のお供たりうるのだ。
それは例えば、前の国のギルドで見かけた際どいビキニアーマーの女戦士。それから、しばらく前の旅路で出会った母性溢れる巨乳のお姉さん。さらには、いつぞやの酒場で酔っぱらってやたらとボディタッチしてきた露出の多い女性。
あとは……そう。今日の夕方ごろ、下衆な男どもに絡まれていたところを助けた、妙に艶めかしい雰囲気の褐色肌の少女。
もしも、そんな刺激的な女性たちと一線を超えることができたなら。あわよくば彼女らにリードしてもらったり、ちょっと意地悪に攻めてもらったりできたなら――

コン、コン

「――――っっっ！？」
そんな被虐的な妄想に浸りながらフィニッシュまで秒読みのルチルだったが、静かな室内に突如鳴り響いたノックが彼を飛び上がらん勢いで驚かせた。
「あのー、ちょっとお話いいですか？」
扉の向こうから聞こえてきたのは、どこか聞き覚えのあるような女の子とおぼしき声。
「ち、ちょっと待って……！」
先ほどまで喘ぐのに使っていた喉から辛うじて制止の言葉を絞り出し、驚きのためにすっかり縮み上がってしまったイチモツを下着の中に押し込む。それから何度かつんのめりながらもズボンを履き直したルチルは、不完全燃焼に終わってしまった行為に拭いきれぬモヤモヤを抱えつつ、突然の来客の正体を確かめるべくドアノブに手をかけた。

「何の用ですか？　こんな時間に……」
　不機嫌な速度で開く扉と共に、投げやりな台詞が招かれざる客へと放たれる。並大抵の相手であれば、その声音を聞いて多かれ少なかれ何かを察して、取り繕うなり帰るなりしただろう。
　ところが、この闖入者に関してはそう一筋縄にはいかないようで――
「あー！　やっぱりあの時のお兄さんだ！」
「……えっ？」
　廊下に響き渡らんばかりの大声を出しながらルチルのことを見上げるのは、魔法使いのようなローブに身を包み、小麦色の可愛らしい相貌に満面の笑みを称えた一人の少女だった。来訪者のまさかの姿に面食らいながらも、ルチルは目の前の彼女を上から下までまじまじと観察する。
（あれ、この子どこかで……）
　眉根にシワを寄せる彼に、上目遣いの不安げな視線が刺さった。
「あの、ボクのこと覚えてますか……？」
　その眼差しがルチルを余計に焦らせたが、程なくして彼は記憶の中から少女の面影を手繰り寄せることに成功した。
「……あっ、思い出した！　君は確か、夕方の――」
「はい、そうです！　よかったぁ、覚えててくれたんですね！」
　少女の表情がパッと明るくなる。その愛らしい笑顔は、紛うことなく彼が数時間ほど前に悪漢どもから救い出したあの少女と同じだった。
（そういえば、さっきまで俺はこの子でエロい妄想してたんだよな……）
　よもや、邪なことに使おうとしていた本人がいきなり現れるとは――途端にばつが悪くなって、ルチルは目線を虚空に泳がせた。
「その節はありがとうございました、お兄さん！　ボクはアヤナって言います！」
「あ、うん」
　そんな事情など知る由もなく、元気よく頭を下げるアヤナ。
「あの時はボクが急いでたせいでろくにお礼ができなかったので、お仕事が終わってから色んな人に聞き込みをしてお兄さんに会いに来たんです！　よかったぁ、ちゃんと会えて」
「お、お礼？　あぁ、俺は別に……」
　アヤナのとてつもない行動力に舌を巻きつつ、ルチルはポリポリと頬を掻いた。結果的にオカズに使おうとしてしまったとはいえ、少なくとも彼女を助けたその時は、彼にアヤナをどうこうしようという下心など微塵もなかったの

だ。ゆえに、お礼なんてする必要はないと告げようとしたのだが――
「ボク、踊り子のお仕事をしてるんです。本当は助けてもらったお礼にボクのステージに招待したかったんですけど、あいにく今日は満席だったので……だから、これからお兄さんのためだけに特別なダンスを踊りたいなと思ったんです！　ね、どうですか？」
　ルチルの言い分を聞くことなく、アヤナは怖ろしい熱量でそうまくし立てた。その剣幕からは、『お礼できるまで帰りません！』という固い意志がひしひしと伝わってくる。
「ボクのダンス、けっこう評判がいいんですよ？」
「いや、でも……」
「お願いします！　お礼をしないとどうしても気が収まらないんです！」
「うーん……」
「あんまりお時間は取らせませんから！　ね？　ね？？」
「……わ、わかったよ」
　次第に距離を詰めてくる彼女の圧に押し切られる形で、ついにルチルは首を縦に振った。もちろん、アヤナのような可愛い子が特別に自分のためだけに踊ってくれるということについては、男として悪い気はしていなかったのだが。
「やったー！　じゃあ、早速お邪魔しますね♪」
　言うが早いか、アヤナはルチルの脇をすり抜けて室内へ滑り込む。
「あ、ちょっと――」
　そんな彼女の奔放さに呆れつつも、ルチルは踵を返して彼女の後を追った。彼の背後で少し軋みながら扉が閉まり、自動施錠の魔法によってそこに二人だけの密室空間ができ上がった。

□　◆　□

　今宵のただ一人の観客をベッドに座らせて、アヤナは自分から少し離れた床の上に小さな立方体の箱を設置した。前面に微小な穴が無数に空いたそれは、魔力を供給することにより音楽が流れる『奏音機』と呼ばれる魔道具だ。
　続いて、彼女は確かめるように自らが着用するローブをぐるりと見回した。どうやら彼女がここまで着てきたそれが、そのままダンス衣装になるらしい。確かに、前面のボタンが全て閉じられたアヤナのローブは、所々に施された可憐な刺繍もあいまって、ふんわりとしたシルエットのドレスのようにも見える。

「……よし。じゃあ、始めますね！」
そうしてひとしきりの準備と確認を終えると、アヤナはルチルの方に向き直って姿勢よく直立した。
「――――」
一呼吸おいて、アヤナが箱に向かって手をかざす。すると、つい先ほどまで静かだった室内が、たちまちのうちにアップテンポでメロディアスな旋律に満たされた。アヤナがくるりと一回転すると、蕾が花開くようにローブの裾が浮き上がる。その陰から覗いた褐色の脚線美が、瞬く間にルチルの視線を奪った。桃色のペディキュアに彩られた素足に健康的なふくらはぎ、そして肉付きの良い太もも――かなり際どいところまでがルームライトのもとであらわになり、ともすればローブの下に直接下着を着用しているのではないかという邪な疑念さえ浮かんでくる。
（い、いや、まさかね）
きっとホットパンツか何か、丈の短いものを履いているに違いない。ルチルは必死にそう考えて邪念を振り払おうとする。いや、たとえそうだったとしても、彼にとって十分に煽情的ではあるのだが……。
そんな童貞丸出しの想像を膨らませる間にも、アヤナのダンスは進んでいく。奏音機から流れる弾むようなリズムに合わせて小柄な身体がぴょこぴょこと跳ね回り、ポップな印象の振り付けを次々とこなしていった。
はたから見れば、それは可愛らしい女の子による可愛らしいダンスショーに過ぎないだろう。ところが、そのショーを間近で眺めるルチルは、どうにもそんな純粋な心のお客さんでいることはできなかった。
「――――っ❤」
動きの随所に差し挟まれる腰をくねらせるような動きや、そのときの妙に挑発的な笑顔、そして額や首筋を流れる汗や、裾からチラチラと覗く生足――それらがやたらとエロティックに見えて、彼の気を散らしてやまないのだ。
（いやいや、いくらオナニーの途中で邪魔されたからって、こんな普通のダンスを見て欲情するなんて……）
そう必死に言い聞かせれば言い聞かせるほど、どんどんアヤナを見るルチルの目がいやらしくなっていく。無論、そんなスケベ心は生理現象として彼の肉体に変化をもたらす訳で、
（あ、やばっ）
寝間着の下腹部が局所的に窮屈になる感覚を覚えて、ルチルは思わず前屈みの体勢を取った。
そんな事情を知ってか知らずか、アヤナのダンスはいよいよ佳境を迎える。転調して激しくなる曲調に合わせて彼女の動きもまた激しさを増し、身体から発せられる熱気がルチルの顔面と、そして股間までをも熱く火照らせた。
（バレたら変態だと思われる……！）

もじもじと内股を擦りながら劣情に耐えるルチル。もはや彼にとって、眼前で繰り広げられるダンスは淫らなテンプテーションに等しい。
（うぅ、早く終わってくれ……とっとと抜きたい……）
ムラムラに支配されつくしたルチルの脳内では、既にこのあと自慰行為で快感を得ることしか考えられなくなっていた。アヤナのショーは、彼にとって見る媚薬も同然の効果を発揮したのだ。
そんな発情状態のルチルをよそに、曲が最後のシンバルの余韻を残しながら鳴り止んだ。
「――――はい！　ありがとうございました！」
ルチルを劣情の淵に追い込んだアヤナは、曲の終わりのポーズのまま、天真爛漫な笑顔を彼に向けた。
「あ、うん……ありがとう、いいダンスだったよ」
性欲に苛まれながらも、ルチルは辛うじて称賛の言葉を捻り出す。その顔が耳まで紅潮し、下半身がひたすら不審な動きをしているのは、誰の目にも明らかだ。
「えへへ、ありがとうございます♪」
花のように可憐なアヤナの笑顔も、ルチルはひきつった表情で受け止めることしかできない。
「どういたしまして。それじゃあ俺はちょっとやることを思い出したから、この辺で終わりに……」
「えー！　まだお礼は終わってませんよぉ！」
一秒でも早くマスターベーションに及びたいルチルの言葉を、しかしアヤナが不満たっぷりの声で遮った。
「今のはまだウォーミングアップみたいなものですから！　全然特別じゃない、普通のダンスなんです！　特別なダンスはこれからですよ！」
「そ、そんなこと言われても……」
まさかの第二幕の存在を知らされ、ルチルがあからさまにたじろぐ。
「もう十分楽しませてもらったし……」
「じゃあじゃあ、こうしましょう！　ボクが今から特別な方のダンスを踊るので、『もういい』って思ったらそこで止めてくれていいです！　そしたらボク、おとなしく帰りますから！　ね、お願いします！」
必死の形相で食い下がってくるアヤナ。そこまで言われて断ってしまったら、まるでルチルが悪者のようになってしまう。
「……あーもう、分かったよ」
少し辟易しながらも、ルチルは首を縦に振った。まぁ、いざとなったらどこか適当なところで止めて帰ってもらえばいいか、と彼は渋々ながら高を括る。
「やったぁ、ありがとうございます！　絶対にお兄さんが最後まで見たくなるようなすっごいダンス、見せてあげますからね♪」

ルチルの返答を聞いたアヤナは、相好を崩して再びルチルの正面のポジションに陣取った。先ほどのダンスと違うのは、今度は直立の姿勢ではなく、なぜかローブのボタンに片手をかけるようなポーズを取っていることだ。
「では、いきます」
宣言と同時に、アヤナの掌が奏音機に向けられる。魔力の送り込まれた機械から流れてきた二曲目は、意外にもさっきとは打って変わった、木管楽器が主旋律を奏でるスローテンポでアダルティなジャズサウンドだ。てっきり一曲目と似たスタンスで来ると思い込んでいたルチルは、アヤナが果たしてこの音楽でどのように舞うのかと急激に興味をそそられた。
そんな好奇の視線を注がれて、アヤナが目を細めて微笑む。
「……！」
その笑みがあまりにこれまでの明朗な少女の印象とはかけ離れていたために、ルチルは思わず息を呑んだ。それはまるで風俗街で客引きをする娼婦が浮かべているような、男を『その気』にさせるための魅惑の微笑み――
「それじゃあお兄さん、ボクのＶＩＰ専用の特別な『裏オプション』、存分に愉しんでイってくださいね❤」
艶めかしく腰を振りながら、アヤナがおもむろにローブのボタンを一つ一つ外していく。焦らすように少しずつ広がる布地の間隙から姿を表したのは、この特別なプログラムを彩るための特別な装いだった。
「ぇ……っ！？」
ルチルの呼吸が驚愕に詰まる。しかし、それも無理からぬことだろう。アヤナのローブの下に秘められていたものは、彼の想像を遥かに凌駕していたのだ。
「……❤」
にやりと口角を歪めるアヤナ。そんな彼女の華奢な身体を守るのは、胸や局部を覆い隠す布地が極めて小さな水着――すなわち、世にいうところのマイクロビキニであった。
しかも、ルチルを混乱に陥らせたのはなにもその過激な衣装ばかりではない。
（う、嘘……？）
信じられない物を見てしまった様子で震える彼の瞳は、アヤナの股間部分に釘付けになっていた。
そこには、女性にあるはずのない膨らみが、小さく、でも確かに存在していたのだ。
「き、君は……！」
「えへへ、女の子だと思ってました？　ざーんねーん、ボクはちゃーんとおちんぽのついた男の子でーす❤」
あまりに衝撃的な告白。アヤナはその事実を誇示するかのように、腰を前に突き出してへこへこと何度か振って見

せた。
「がっかりしちゃいました？　ボクのこと、嫌いになりました？　それとも……❤」
くすくす、とアヤナが愉快そうに笑う。
一方のルチルは、状況が整理しきれず茹った頭で必死に思案していた。
（お、男の子……？　じゃあ俺は、男の子相手に欲情してたってことなのか……！？）
ルチルは、自身に『そっち』の趣味がないことを自覚していた。現に、これまでに何度かハンサムな男にナンパされたこともあったが、嫌悪感こそあれど心揺さぶられることなど一度もなかった。もちろん、他人がそういった性的指向を持つことに関しては一定の理解を示しているものの、あくまで自分の愛欲の対象は女性だけだと、そう考えていた。
……はずだったのに。
「ねえねえ❤　ボクのエッチな衣装、どうですか？❤」
なぜだか、ルチルは目の前で繰り広げられるこの淫らなショーから目を離すことができなくなっていた。
「あはっ❤　お兄さんすっごい見てる❤　そんなに見られたら、ボクも興奮して……んっ、おっきくなっちゃう❤」
何がおっきくなってしまうのか、などとは問うまでもない。アヤナのモノがルチルと同じ生理現象を起こし、むくむくと膨張を始めたのだ。そうなると、平常時の数倍まで膨らんだそれを、元よりいっぱいいっぱいだったマイクロビキニが隠しきれるはずもなく、
「あん❤　ボクの恥ずかしい勃起おちんぽ、お兄さんに見られちゃった……❤」
綺麗なピンク色をした亀頭が、おずおずと水着の陰から顔を覗かせた。
「でもボク、見られるの好きだからぁ……❤　恥ずかしいところも全部お兄さんに見てほしいな❤」
己の性器まで晒してすっかりスイッチの入ったアヤナは、さらにルチルを沼に引きずり込むべく、後ろに右手を突きながらM字に脚を広げ、左手を股間の少し下――肛門がある位置に添えた。いかんせんビキニを構成する要素の大部分が細い紐であるために、彼のそこはおおよそ隠されているとは言えず、少し縦割れ気味の肛門やそのシワがほとんど丸出しの状態だ。
「ここ……ボクのエッチな『おまんこ』も見せてあげますね❤」
アヤナのたおやかな指が、アナル――もとい『おまんこ』を押し広げ、赤々とした内部を惜しげもなく見せつける。
「ボクのおまんこ、おもちゃは挿れたことあるけどおちんぽは挿れたことないから、まだ処女なんですよ～❤」

外気に晒されてひくひくと収縮するそこは、まるで不浄の穴とは思えないほどに綺麗な色形をしており、女性器さながらにルチルの肉欲を煽った。
（こ、こんな……相手は男なのに……）
そんな淫靡なストリップショーを目の当たりにしたルチルの口の中は、もはや砂漠のようにカラカラだ。粘っこい唾を飲み下しても癒えぬ渇きは、ただ室内にこもる熱気のみが原因ではない。
――同性たる男に対して催した劣情。そして、そのことへの強い背徳感。それらがないまぜになり、得も言われぬ感情が彼の脳内をいたくかき乱すのだ。
さらに、そんなルチルの心身を襲う異常は、当然アヤナの目にもはっきりと映る。
「どうしたんですか、お兄さん？❤」
気づけばアヤナはルチルのすぐ目の前に立ち、淫魔じみた笑顔を浮かべて彼の顔を覗き込んでいた。
「ボクのダンス、お気に召さなかったんですか？」
鼻にかかった猫なで声がルチルの耳を撫でる。その尋ね方は、明らかに答えが「ノー」であることを知っている声色だ。
ルチルは投げかけられた質問に答えられず、ただただおぼつかない視線を宙にさまよわせる。
「うーん、困っちゃうなぁ……このままじゃボク、お兄さんに『帰れ』って言われちゃうよ～」
大仰な仕草で頭を抱えるアヤナ。無論、彼は帰らされるなどとは微塵も思っていないのだろう。
「ボク、まだまだお兄さんにお礼し足りないのになぁ……どうしよっかなぁ……」
アヤナはなおもクサい小芝居で悩むような素振りを見せる。そうして数秒ほど考え込んだのち、まるでそれが既定路線であるかのように、彼は「そうだ！」と手を打った。
「じゃあじゃあ、こういうのはどうですか？　ボクの働いてるお店では、本当はお客様とボクが触れ合うのは厳禁なんですけど……」
アヤナの唇がルチルの耳元に寄せられ、魅惑の囁きが鼓膜を震わす。
「でも、ここはお店じゃないから、ボクがお兄さんのこといーっぱい気持ちよくしてあげますよ？❤」
「っ……！？」
想像だにしなかった過激な提案に、ルチルは驚愕の眼をアヤナへ向けた。
「きっ、気持ちよく……って」
「あはっ❤　やだなぁ、そんなの決まってるじゃないですか❤　こんなにパンパンで苦しそうになっちゃったお兄さんの『そこ』、ボクが責任を持ってヌキヌキしてあげるってことですよ❤」

そう言って、アヤナはあたかも空想上のナニかをしごくかのように、空中で筒状に握った手を前後に動かして見せる。そのあまりに煽情的すぎる囁きとハンドサインは、ルチルの理性を打ち砕くには十分すぎる一撃だった。
「どうですか、お兄さん？❤　ボクなら、脳みそがとろけちゃうくらい気持ちよくイかせてあげられる自信があるんですけど……❤」
鼻先が触れあいそうなほどに顔を近づけながら、アヤナの手が布越しにルチルの膨らみを撫でた。
「ぁ……❤」
ルチルの口から甘い吐息が漏れ出す。当然、それを聞き逃すようなアヤナではない。
「ねぇねぇ、こうやってズボン越しにカリカリされるだけで満足ですか？❤　直接触らなくてもいいんですか？❤」
小悪魔的な囁きが、純粋な青年の心をひどく誑かす。
「ボクのやわらかおててでお兄さんの敏感なおちんぽを握って、シコシコ❤　ぐちゅぐちゅ❤　……あ、もしかしてお口でされるのをお望みですか？❤　もちろん、それでもいいですよ❤　ボク、普通の人よりベロが長いから、それでたくさんペロペロしてボクの唾をおちんぽにたっぷり染み込ませてあげますね❤　もちろん、そのあとはお口の中でじゅぽじゅぽして、お兄さんがイっちゃったらせーしもごっくんしてあげます❤」

アヤナは、自身も男であるがゆえに、男を狂わせる方法を完全に熟知していた。彼の紡ぐ口説き文句は、たとえ経験豊富な好色漢であったとしてもコロっと落としてしまうだろう。
さて、それでは色を知らないルチルがそんな誘惑に耐えられる道理などあるだろうか？
「ね、もう素直になっちゃいましょうよ❤　ボクの身体で、最っ高に気持ちよくぴゅっぴゅしましょ？❤」
――もちろん、あるわけがない。
「……」
無言のまま俯いて、耳まで真っ赤に染めながら、ルチルは小さく首を縦に振った。初めての性体験が同性相手になってしまうなんてことは、もはや彼にとっては些細なことだ。
「やったぁ！　えへへ、嬉しいな❤」
望み通りの返答を得たアヤナの表情が、一瞬だけ年相応のものへと戻った。しかし、それもわずか数秒間のこと。
「それじゃあ……お兄さんが一生忘れられないような快感を、今から刻み込んであげますね❤」
汚れなき獲物を自らの手で汚す絶好の機会を前に、踊り子の皮をかぶった淫魔は目を細めて悦びをあらわにするのだった。